真夏の二ヶ月間、戸田の民家をまる借りする合宿所は、焼け死にしそうな川での練習で明け暮れる。

それはどしゃぶりの雨が降ろうが槍が降ろうが、はたまた、台風が来ようが、とにかく、コーチが作成した練習スケジュールは絶対に変更せず行なわれる壮絶なものである。

そして、川は眺めていると涼しげだが、ボートの上はそうではない。

水が反射鏡の役割をして、強烈な照り返しがあり極めて暑い。

一日二回、午前と午後各四時間、ボートを漕いで、漕いで、漕ぎまくるのである。

結果、体内の水分は出尽くしてしまい、意識朦朧となる。

で、キャプテン以下全員が川から上がると、まず、真っ裸になってしまう。

「おー、冷てえッ・・・、ああー、気持ちいい・・・、最高だあ」

「おい、剛ッ、早くしろよッ。後が詰まってるんだから・・・」

四年生の田中剛は慌てもせず、濃い胸毛をゴシゴシと洗っている。

「そうせかすなよ。ああー、極楽、極楽なんちゃってね」

バケツの底を釘で穴をあけただけの特製のシャワーが、庭の木に吊るされている。

「いい加減にしろよッ。お前はいつも長すぎるんだから・・・・くそッ、暑いなあ」

「ほらッ、英明」

とばかり、剛が両手一杯の水を同輩の木島英明にかけた。

「馬鹿ッ、何するんだッ。あー、冷てえ」

「気持ちいいだろう。ほら、ほら・・・・」

「やめろよッ、もういいだろう。どけ、どけ」

「はい、はい。さあ、どうぞ」濡れた髪を両手でかきあげると、真っ裸の剛はこれ見よがしに、堂々と庭を横切って行った。

火照った体を冷却する真ッ裸の若者たちのあられもない姿は、若い娘のいる隣りの家から丸見えである。

が、おかまいなしである。

疲れ切って、意識の薄れた連中に余分な雑念などはまったくない。

丸見えであろうがなんであろうが、次から次と裸族になってゆく。

シャワー後、しばらくの間、着衣する者はない。

見苦しいものをブラブラさせながら、ブラブラと障子の開け放たれた狭い家の中を徘徊する。

そのあげく、合宿所は裸族の巣窟と化す。

文三は入部したばかり、そのような状況で、目のおき場に困った。

上級生になったら、絶対に、あんなことはすまいと心に誓った文三であったが、一年後、すんなりと裸族に仲間入りした。